

## 【コメント】

# 江戸時代における儀式・儀礼の成立とその意味 － 徳島藩を事例に－

根津 寿夫

徳島市立徳島城博物館

## はじめに

渡辺浩先生の報告は、新井白石の進めた儀式改革を論じたものである。その改革の要諦が儒学の「礼」である。統治の基本手段が儒学の「礼」であったが、民衆の模範的存在として「礼」に則り生きる統治者、その姿や魅力によって民衆を感化するというスタイルこそが統治の基本的あり方としている。白石は、この儒学の「礼」に基づき儀式改革を進めたが、その政策は八代将軍吉宗によって否定され完全に葬り去られてしまう。しかし、白石の希求した「礼」の秩序は後に評価され、徳川幕府を倒した明治政府にも影響を与えたというもので、本報告の指摘は極めて興味深い。

さて本稿で注目したいのは、渡辺報告の第二章「徳川将軍をめぐる儀礼と儀式」で指摘の「将軍の行っていた多くの儀式はその意味が不明確であった」という点である。幕府が行った儀式・儀礼については、その意味を問うということ、すなわち理論より行うこと自体が重要であったとする。これは同氏が「『御威光』と象徴 一徳川政治体制の一側面―」（『思想』740号）で指摘された、「武威」や「威光」、「格式」を統治の拠り所として幕府の支配秩序が維持されていたということに他ならない。意味付けの曖昧な国家儀式こそが、白石の克服すべき課題であったと考えられるのである。

このような公儀の儀式・儀礼について、私は公儀の一翼を担う大名の側から考察することで、この問題について考えてみたい。

なお、本稿で事例として取り上げるのは、徳島藩のケースである。個別藩レベルにおける儀式・儀礼が、いかなる理由あるいは背景によって生まれ、そしてどのような意味を持ったのか、ということをも明らかにしてみたい。

## 1. 徳島藩と大坂の陣

蜂須賀家は、豊臣秀吉に仕えた小六正勝を中興の祖とし、その子家政が天正13年(1585)に阿波国17万6千石を与えられ成立した豊臣取立大名家である。慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いでは当主家政は中立の立場をとり隠居し高野山に赴いたが、15歳の嫡子至鎮を徳川家康のもとに派遣した。戦後所領は安堵され、ここに徳島藩が立藩したのだった。この関ヶ原の戦いでは目立った戦功はなかったが、慶長19年(1614)の大坂の陣では当主至鎮が9,100人の将兵を率いて大坂城包囲にあたった。冬の陣は夏の陣に比べ戦闘行為の少ない合戦であったが、徳島藩は大坂方の守備した二つの砦の攻略にあたる等の目覚しい功績をあげた。この戦いで手柄の

あった、稲田修理亮示植・同九郎兵衛植次・山田織部佐宗登・樋口内蔵助正長・森甚五兵衛村重・同甚太夫氏純・岩田七左衛門政長の七人の藩士には、大御所家康と将軍秀忠からそれぞれ感状が発給された。藩主蜂須賀至鎮にも同じく感状が発給され、あわせて松平姓が下賜された。そればかりか、夏の陣後の元和元年(1615)閏6月には、淡路一国7万石が加増されたのだった。ここに、阿波・淡路二国を領有する徳島藩の藩領が確定した。

大坂冬の陣における徳島藩の果敢な軍事行動は、豊臣取立大名であった蜂須賀家の豊臣色の払拭とともに徳川家に対する無類の忠誠心を表現するものであった。その反対給付として、徳川家は大坂に近接し瀬戸内海の水上交通の要衝であった淡路国を加増し、その支配を委ねるといふ、破格の評価を与えたのだった。

このように大坂の陣後の淡路国加増は幕府・徳川家と徳島藩・蜂須賀家の双方にとって政治的に重要な意味を持ったのである。

## 2. 由緒・吉例としての大坂の陣

軍功により淡路一国拝領等の大きな成果を得た大坂の陣を、徳島藩ではいかに由緒・吉例としていったか。これは言うまでもなく徳島藩の儀式・儀礼と直結するものである。ここでは大坂の陣に関する由緒・吉例について具体的にふれてみたい。

### (1) 大坂の陣で使用した武器・武具

まず初めにあげられるのは、大坂の陣で藩兵を率い奮戦した藩主至鎮の着用した「唐冠形兜」である。蜂須賀家では、至鎮の戦功にあやかるため、この「唐冠形兜」を「家の兜」として敬い、作り続けていくのであった。

具足は江戸時代には戦乱はなくなり本来の意味からすれば実用の品ではなかったが、主に儀式の場で使用され儀式を象徴する道具であった。大名家では跡継ぎが元服を迎える際に「具足始め」の儀式を行う習慣があったが、その儀式のために具足を特注した。これ以外にも具足は作成され、大名家の当主は複数の具足を所持したと考えられる。

蜂須賀家の「唐冠形兜」は、同家の武器・武具の記録である「御定之御武具図式」<sup>1)</sup>には、「御召領御兜唐冠」として同書の冒頭に記されている代表的な品である。現存する「唐冠形兜」は二領(徳島県立博物館蔵・徳島市立徳島城博物館蔵)だけであるが、吉例の具足として徳島藩の儀式の中に生き続けたのである。

次に大坂の陣で使用した旗・馬印・太鼓である。少々長いが、蜂須賀家文書「草案」の「御簾・御馬印之事、附御具足被召始事」を引用する。

「一家政様御代御簾・御馬印之儀、如何様之御品ニ候哉慥ニ承不申候、慶長十九寅年大坂御陣之節、至鎮様為御持被遊候御簾ハ練絹白紺すじ也、御紋蛇之目之御簾三拾本、御囲居紺地吹貫蛇ノ目白之御紋一ツ、付出シハ鳥毛三尺之棒竿之先ニ指、御小馬印ハ金之錫杖御鎗也、右御簾・御馬印とも御吉例之御簾御囲居と号、今以御櫓ニ御座候趣、元和五未年安芸広島へ御出陣被遊砌も、右之御簾・御馬印ヲ御

持せ被遊候と相見へ申候、(中略)

右ニ相記候大坂御陣ニ御持せ被遊候御簾・御馬印御吉例之御品ニ付、其後は御代々様御召之御具足新ニ被 仰付、出来之上、始而被為 召候節、必右御品并大坂御陣ニ御用被成候御太鼓御出させ被成候旨、但始而之御具足着ハ御拾三歳ニ而被為 召初候事、(中略)

忠英様ニハ元和九亥年御拾三歳ニ而御具足被 召初、蓬庵(家政)様御具足御召せ被成候旨、則 蓬庵様之御具足ヲ御用被遊候由、其後寛永六巳年御召之御具足出来ニ付、正月廿日右御具足始而被為 召候、御規式は大嶋源五右衛門・山川与三左衛門ニ被 仰付、大坂御陣ニ御為持被成候御吉例之御簾・御馬印、鷲ノ間御庭ニ張立、御陣太鼓ハ於御座敷二三四之数ヲ打、厳重之御規式御座候旨、光隆様御已来ハ御簾・御馬印・御太鼓、御床之上ニ御指置之趣ニ御座候」<sup>2</sup>

すなわち、大坂の陣で使用した旗と馬印を「御吉例之御簾御囲居」と呼び、徳島城内に保管するとともに、広島城の受け取り等で徳島藩兵が出陣する際にはそれらを利用したという。また代々の「具足始め」の儀式においては、旗と馬印に加えて同じく大坂の陣で使用した太鼓も利用したのだった。三代藩主光隆以降は、それらを床の間に飾り、まさに家宝扱いしたのである。

武家の人生儀礼として重要な意味を持つ「具足始め」の儀式に、大坂の陣で使用した吉例の品々が実際に利用され、あるいは飾られることによって、大坂の陣の記憶が維持されたのである。

## (2) 年中行事と徳島藩

正月11日は江戸時代の武家の年中行事では重要な意味を持った「具足鏡開き」が行われた。この行事は武家の表道具であった具足や武器を飾り、祝儀後に供えおいた具足餅を欠き割って参列者に配付し賞翫したというものである。<sup>3</sup>

この「具足鏡開き」の行事は江戸初期には正月20日に行われていたが、のちに11日に変更された。徳島藩における変更の理由を紹介する。

「承応元辰正月

覚

年頭御具足鏡ならし之御祝日御吉例故、御代々只今迄ハ正月廿日御嘉例ニて候へ共、此度より御立替被成、御吉例を正月十一日御祝日ニ御立被成事、大猷院様(徳川家光)御忌日ニ付御立替

但大坂御軍功ニよつて正月十一日御感状御頂戴、松平御称号御拝領ニ付而也一御具足鏡ならし御祝日之儀、去々年より向後正月十一日ニ被 仰付候旨、御意ニ付、稻田九郎兵衛殿へ主水・豊前方より被申達候事

承応三年正月五日

」<sup>4</sup>

一般的には、この日にちの変更は承応元年(1652)に三代将軍家光が没し、20日がその命日にあたるためと理解され、ここでもそのことがうかがえる。徳島藩では、変更日の11日は大坂の陣の軍功によって藩主至鎮が将軍秀忠から感状を与えられ、また松平姓を許された「吉例の日」なのである。11日への変更は徳島藩にとって意味があったのである。

もう一点、この正月11日の行事に関する史料を掲げる。

「 正月十一日国元ニ而之作法本ニ候御感状頂戴之次第

一御感状頂戴之刻、我等従 公儀頂戴之御紋付熨斗目勝陳色麻半上下着、於居間御感状箱開、扇子ニ載居間上段於上頂戴、但十一日之日附之御感状也、畢而熨斗三方奥之小性腰物方之面々之内熨斗三方持出差上取、尤前々より奥小性腰物方感状箱請持上箱之鍵も預ル、但江戸おゐて感状箱不開、箱之上より手を懸頂戴、

是迄御感状頂戴之次第、從是具足鏡開之次第

一嘉例ニ而者無之候得共、我等代ニ成、召領之具足・同召替小書院上段之間ニ飾ル也、前々ハ無之事也、但於江戸ハ居間書院江召領計武具飾ル

一於居間家老共相伴之刻、我等衣服同前、家老共衣服熨斗目麻半上下

一大晦日具足鏡餅供候刻、国ニ而八年男寺沢主馬罷出手懸候、尤台所下役人罷出飾附ル、江戸ニ而者年男申付候留守居相勤ル也、下役人右同断、国之通り、但右之訳故、国・江戸共具足之餅大晦日より十一日迄置ト相見ル

一於江戸具足之鏡、居間書院江置也

(中略)

一十一日家老共罷出候者、我等御感状頂戴ニ付罷出候訳ニ而ハ無之候、具足鏡

平ニ付罷出候事ニ候得者、公辺へ懸候事ニ而ハ無之、私之方へ懸候事ニ候

」<sup>5</sup>

この史料は六代藩主宗員の頃の年中行事を記録したもので、時代は享保期である。11日は、言うまでもなく「具足鏡開きの儀式」の行われる日であったが、その儀式に先行して「感状頂戴の儀式」が挙行されている点が注目される。感状とは大坂の陣で至鎮が与えられたもので、感状は参勤交代時にも携行され常に藩主の側にあったが、この史料が示すように、年頭には箱から取り出して感状を確認する儀式が行われていたのである。藩主の服装は公儀拝領の三つ葉葵紋入りの熨斗目という姿で、これに臨んでいた点も興味深い。

この史料でもう一点指摘したいのは、同じ日に行われた二つの行事の意味合いである。史料の末尾に、宗員が述べたものと思われるが、「感状頂戴の儀式」は公儀を意識した行事であり、家老たちが参加したのはあくまでも蜂須賀家の私的な行事である「具足鏡開きの儀式」としてゐる。これは家老たちが混同したのではない。本来的に両者は出発点から一体のものではあったが、宗員が公私を区別し「感状頂戴の儀式」を公儀と関連付けて理解しているのは、彼自身が感状を幕府と徳島藩を結ぶ存在として認識したからに他ならない。江戸中期の宗員の時期に

なると、大坂の陣に関連した品やその由緒が蜂須賀家の儀式の中に盛り込まれているだけでなく、より積極的に幕藩制的秩序<sup>9</sup>の装置として意識し利用されていることがうかがえる。そして、大坂の陣をシンボライズするものこそが、この感状なのである。

### 3. 感状と徳島藩の儀礼

初代藩主蜂須賀至鎮が將軍秀忠から与えられた「感状」は、まさに家宝として認識されている。

「 今度願之通隠居、家督被仰付候ニ付而者、御感状を始、代々重器、且両国政事并  
留書入帳面等、夫々譲渡候間可被受取候事

文化十年九月七日

阿波左少将 治昭（花押）

松平弾正大弼殿

」<sup>7</sup>

この史料は文化10年(1813)十一代藩主治昭の隠居にあたっての引き継ぎ書であるが、家宝の代表として「感状」を認識することができる。

この「感状」は、先述のとおり、参勤交代の際には黒漆塗りの感状箱に入れて必ず持参されたが、国元においては徳島城御殿の「感状之間」で保管され、また江戸の藩邸においては同じく「感状之間」に納められていたのである。つまり、「感状」は常に藩主とともに存在したのであった。

こうした「感状」に対する取扱い、管見の限りでは遅くとも18世紀の初めには確認される。またその目的であるが、大坂の陣での軍功の象徴として、徳島藩の武威を対外的に示すためと理解される。特に幕府に対しては徳島藩の無類の忠誠心を具現化したものとして「感状」は機能したのである。さらに対内的には、年頭の「感状頂戴の儀式」があるように、蜂須賀家の年中行事に位置付けられ、恒例の行事として徳島藩の伝統として機能していたのである。

### 4. 「感状之家」と幕藩制的秩序

さて、藩主至鎮とともに感状を給付された藩士が六家あった（感状下賜は七人だが、稲田家は父子のため六家）。彼らは徳島藩の最上格の家老、あるいはそれに次ぐ中老であったが、いずれも加増あるいは優遇されていた。彼らは「感状之家」と呼ばれ、家臣団のなかで特別視された存在であった。

「感状之家」の森甚五兵衛家と森甚太夫家は中老でありながら「船手役（のち海上方）」を世襲した家である。両家の先祖は、蜂須賀家政が阿波に入部した当時、土佐泊城（鳴門市）に籠もり長宗我部元親に屈しなかった海の豪族である。蜂須賀家中の水軍として軍功が目覚しかったが、同家の世代交代の進展と徳島藩水軍の組織化によって、両家は水軍組織のラインから阻害されてしまう。江戸中期には復権を図るべく森両家は藩当局に訴えるのである。結果として、森両家は享保15年(1730)に職権の根拠となる藩主の判物を発給され、水軍の統括者としての地位を与えられたのであった。

森両家に判物を与えたのは享保13年に相続したばかりの六代藩主宗員であった。先代藩主綱矩の治世は50年に及んだが、彼は家臣に降下した分家出身であったため、長い治世にもかかわらず知行宛行状や判物を発給せず、藩主権威が低下し藩内の秩序が弛緩したとされる。綱矩の跡を継いだ宗員は、藩社会において強固な秩序化を再現しようと着目したのが「感状之家」であった。彼のねらいは大名家の創設期に活躍した軍功の家臣である「感状之家」を再評価していくことであった。すなわち、森両家を取り立てることによって「感状之家」を頂点とする家臣団の秩序化を目指したのである。また家臣団の秩序化は藩主権威の高揚に直結するものであり、「感状之家」を取り立てていくことは藩主の側にとっても意味を有したのである。

「感状」は徳川将軍から発給され、幕府と徳島藩との関係を確認する装置であったが、幕府と藩との関係は藩を支えた藩士の存在を抜きにしては成立しえず、幕藩制的秩序は[将軍—大名—家臣]の相対的な関係によって成り立っていたと考えられる。宗員が正月11日の「感状頂戴の儀式」を公儀の行事として理解したのは、公儀権威を梃子にした藩内の秩序化を意図したものである。年中行事をはじめとする儀式・儀礼は家臣団の秩序化のため積極的に利用されたのである。

## おわりに

徳島藩の儀礼・儀式において、特に大坂の陣の由緒・吉例や軍功の象徴であった「感状」をめぐるものについて考察してきた。徳島藩にとって大坂の陣こそが幕藩制的秩序の要諦であり、藩社会の秩序を定めていたのである。それ故、大坂の陣に関する儀式・儀礼については、その意味付けや成立の背景を明確にすることができるのではないと思う。

なお、公儀の儀式・儀礼の意味は、いわば多義的であり曖昧であるが、個別藩の事例が少しでも参考になればと思い考察を加えた次第である。

## 注

- 1 国文学研究資料館史料館蔵「蜂須賀家文書」。以下「蜂須賀家文書」とする。
- 2 「草案」（『史料館叢書 5 徳島藩職制取調書 上』、国文学研究資料館史料館編、1983年発行）
- 3 鈴木敬三著『有職故実辞典』、株式会社吉川弘文館、1995年発行
- 4 「忠英様・光隆様御直仕置之節御判物御書付」。「蜂須賀家文書」174-3
- 5 「宗員様 年中御記録并江戸共 帳」。「蜂須賀家文書」394
- 6 福田千鶴著「幕藩制的秩序の形成」（山本博文編『新しい近世史① 国家と秩序』、株式会社新人物往来社、1996年）
- 7 「（治昭隠居家督譲渡之節）書付」。「蜂須賀家文書」844